

に闡明せられたりと雖、もとより未だ完きに非ず、研究の進捗に伴ふて疑義また百出するは、もとより免れざる處なり。而してかゝる死語の研究に於て最も必要なる方法は、同一の事柄を他の知られたる國語を以て記述せるものを見出し、之と對比研究することにして、彼の二國語、もしくは數國語を以て記せる古碑の如きが、言語研究上に重要視せらるゝ所以なりとす。余が、前記橋君の獲たる一卷を親しく見たるは一昨年三月なりき、而して其の性質の佛典なることは一見して明らかなりしのみならず、卷末には其の經名をも記載せるを認めたり、然れども此の經が漢文もしくは其の他の語を以て、今日に存せるものなりや否やを知るに至る迄には、寡聞の爲なりとは雖、實に少からざる苦心を重ねたり、これ後に述ぶるが如く、此の卷末の經名と酷似せる一卷は、漢文の藏經中に收められながら、然も其の内容は兩者相合せず、よりて或は同一經の異名に非ずやとの疑を生じたりしが爲にして、此の疑問の爲には藏中幾數百の經について、一々検索を試みざる可らざりしなり、されど其の結果は終に得る所なく、一時は漢文にては今日存在せざるものなりと思惟するの止むなきに至りしが、其の後大日本續藏經編纂主任中野達慧君より、其の目錄一本を惠與せらるゝに及びて、茲に初めて此の經の漢文のものが、從來の藏外に現存するを知るを得て、曩時の辛勞の徒爾なりしを悟りたると共に、積日の搜索終に其の果を得たるを喜べり。

經は寫眞によりて示すが如く四百五行の長きに互れる卷子にして、初めの一部分を缺けり、文字の體裁は他の寫經に於ると等しく頗ぶる謹嚴にして、紙上に野を劃して右より左に墨を以て横書し、佛名を記するに當りては、特に意を用ひて之を朱書せり、其の書寫の年代は卷中に記されざるを以て、明らかに知るよしなしと雖、此の經の作成が後に述ぶる如く中唐の頃なれば、勿論其の以後のものなること争ふ可らず、吐魯番附近雅兒湖トルファンヤルホの地より發見し